

## MLF2020 プログラム

日時：2020年9月12日（土）・9月13日（日）

開催方法：Zoomによるオンライン開催

9月12日（土）

時間	内容	発表者	タイトル
12:55-13:00	開会挨拶・発表/質疑応答に関する説明		
13:00-13:50	発表 1	氏家 啓吾 (東京大学大学院)	個体レベル名詞・事態レベル名詞の区別についての 認知言語学的考察
14:00-14:50	発表 2	山泉 実 (大阪大学)	「並列名詞」とそれが主要部になる名詞句： 両者の意味の関係と語彙的特徴
14:50-15:10	休 憩		
15:10-16:00	発表 3	林 則序 (東京大学大学院)	遊離するように見える NP 数量詞の格付与について
16:10-17:00	発表 4	森山 倭成 (神戸大学大学院)	日本語におけるアロキュティビティ

9月13日(日)

時間	内容	発表者	タイトル
12:55-13:00	発表/質疑応答に関する説明		
13:00-13:50	発表 5	李 慧 (東京大学大学院)	V-V型複合語における品詞の違いに伴う 意味の変化について
14:00-14:50	発表 6	大関 洋平 (東京大学)	Compound verbs in transitivity harmony and alternation*
14:50-15:10	休 憩		
15:10-16:00	発表 7	谷川 みずき (東京大学大学院)	ノルウェー語の自動詞化と動詞意味論
16:10-17:00	発表 8	前田 宏太郎 (東京大学大学院)	非対格他動詞としての「ラス」形
17:00-17:05	閉会挨拶・お知らせ		

\*発表言語は日本語の予定

【参加方法】今回は Zoom による開催となります。参加は無料です。この分野の研究に関心のある方であれば、どなたでもご参加いただけます。参加される方は以下の URL から事前登録をお願いします。登録後、ミーティング参加に関する情報の確認メールが届きます。

<https://zoom.us/meeting/register/tJYvd-2tqzsiE92M5LMtTSGgbybougz9uXRt>

## 個体レベル名詞・事態レベル名詞の区別についての認知言語学的考察

キーワード：事態レベル名詞、特定事象解釈、生成語彙論、認知言語学

### はじめに

動作主名詞をはじめとする名詞に関して、事象の個別のトークンに関連づけて理解されるものとそうでないものの区別があることが知られている（宮島 1997）。例えば「ヴァイオリニスト」と「乗客」はいずれも行為によってその意味が特徴付けられるが、前者は行為の特定のトークンとは関係なく習慣的・潜在的に理解されるのに対して、後者は行為の特定のトークンとの関連で理解される。この後者の解釈を特定事象解釈と呼ぶ。本発表では、この問題に対する生成語彙論の分析の問題点を指摘し、認知言語学の立場から新たな分析を提案する。特定事象解釈の問題をカテゴリー化の観点から捉え直すことで、より一般的な現象の表れとしてこの現象を捉えることが可能になる。

### 生成語彙論の分析

生成語彙論（Pustejovsky 1995）ではこのような2種類の名詞はそれぞれ個体レベル名詞・事態レベル名詞と呼ばれ、上述の違いは名詞のクオリア構造において事象の概念が目的役割 (telic role) に割り当てられるか、主体役割 (agentive role) に割り当てられるかの違いとして分析される（影山 2002, Ono 2016）。

クオリア構造の目的役割は、「ナイフ」等の道具を指す名詞の意味記述にも用いられる。道具を表す名詞は内在的機能として特定の行為概念と結びついているとされ、その行為概念が目的役割に割り当てられる。

### 問題提起

生成語彙論の分析においては、道具名詞は対象の内在的機能と結びついていると想定されている。しかし、道具名詞の中にも（「乗客」に見られるような）特定事象解釈を持つ名詞が存在する。例えば名詞「踏み台」は、上に乗って高所にアクセスするために使われていれば、雑誌の束などそれを本来の機能としない物でも指すことができる。その場合には事象トークンとの関連で理解される。他に「武器」「おもしろ」「支え」などの道具名詞も特定事象解釈を持つ。さらに、「現場」「会場」など一部の場所名詞もそのような解釈を持つ（宮島 1997）。

生成語彙論ではこうした名詞について、特定事象解釈を持つことを理由に当該行為を主体役割に割り当てることになると思われる。しかしながら、「踏み台」は乗ることを本来の機能とする物も、臨時的にそう使われた物も指すことができ、「あそこは踏み台がないと届かないよ」といった発話では、それが物の本来の機能かどうかは意識されないであろう。目的役割／主体役割の二分法を前提とする生成語彙論では曖昧 (ambiguous) になることが予測されるため、このような不明瞭 (vague) な用法は問題となる。

## 認知言語学の立場からの説明

特定事象解釈を説明するには、カテゴリー化（対象をXとみなすこと）の働きを考慮する必要がある。本発表では、特定事象解釈は事象トークンにおいて当の働きをしたことに基づいてカテゴリーの成員とみなされることによると主張する。例えば雑誌の束の上に乗って電球の交換をする際にそれを「踏み台」とみなすのは、交換作業という事象トークンでの働きに基づくカテゴリー化である。

本発表は次のような、「XをYに」が従属節として働く「地図をたよりに構文」（三宅 2011）に着目する。この構文は、特定の事象での働きに基づいてXをYとしてカテゴリー化することを表す。

- (1) 指紋を手がかりに犯人を捜索している。
- (2) あの事件をきっかけに対策が法規制が進んだ。

ここでは「指紋」の指示対象が主節の表す捜索事象トークンで現に特定の働きをしていることに基づいて「手がかり」としてカテゴリー化されていると言える。

上述した道具名詞「踏み台」や場所名詞「会場」が、次のような例において特定事象解釈となることは、これと同じ原理で説明できる。

- (3) 雑誌の束を踏み台に電球を交換した。
- (4) 体育館を会場に結婚式を行った。

さらに、次の文に見られる名詞「追い風」の比喩的用法も、特定事象に基づくカテゴリー化の一例として捉えられる。

- (5) 好景気を追い風に、店舗数を増やした。

個体レベル名詞・事態レベル名詞の区別として捉えられてきた現象は、「手がかり」「きっかけ」といった名詞やある種の比喩にみられるような、特定事象での働きに基づくカテゴリー化という一般的な現象の表れなのである。また、生成語彙論の立場では問題となる不明瞭な用法も、名詞の語彙的意味が異なるのではないと考える本発表の立場では問題にならない。

## 参考文献

影山太郎 (2002) 「動作主名詞における語彙と統語の境界」 『国語学』 53: 44–55.

三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』 くろしお出版.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.

Ono, Naoyuki (2016) Agentive nominals. In: Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese lexicon and word formation*. 599–629. Berlin: Mouton de Gruyter.

「並列名詞」とそれが主要部になる名詞句：両者の意味の関係と語彙的特徴  
 キーワード：並列名詞，選択名詞，極性名詞，潜伏疑問，形態論的スキーマ

「合否」「善悪」「男女」など一部の等位複合名詞（「並列名詞」）は，潜伏疑問名詞句となる場合に，従来の潜伏疑問研究で専ら想定されていた疑問詞指定疑問文とは異なる疑問（極性疑問や選択疑問）を潜伏させる（山泉 2019）。辞書に登録されているもの以外にも，「合格不合格（が不明）」、「いい悪い」，次例などが可能で，形態論の観点からも興味深い。本発表は主に意味を扱う。

(1) 冷やしたぬきは，そばうどん [≡そばかうどんか]のどちらにしますか。

並列名詞は，極性疑問が潜伏できる**極性名詞**（合否，是非，真偽，勝敗，勝ち負け，有無，あるなし，等）と選択疑問が潜伏できる**選択名詞**がある。後者は，極性名詞と振舞いが類似する「**第一種選択名詞**」（善悪，正邪，いい悪い，優良不可，大盛り普通盛り，等）と，**第二種選択名詞**（男女，犬猫，早慶，英米，そばうどん，等）がある。前二者を次の理由から「選言名詞」とまとめる。

選言名詞は，「合否[≡合格か不合格か]（が変わった）」や「善悪[≡善か悪か]（が不明）」のように選言で換言できる選言用法が中心で，連言で換言される連言用法は，文脈の助けが必要である（(2)）。第二種選択名詞は，「(あの) 男女[≡男と女]」のような連言用法が主で，選言用法では文脈の助けが必要だ（(1)）。

(2) a. 合否両方の可能性がある。b. この人物は正邪を併せ持つ。

並列名詞は，通常の複合名詞とは様々な点で異なる。1. 後部要素「合否」「善悪」「男女」が主要部ではない。2. 構成要素が名詞である必要がない（「いい悪い」）。前後の品詞が異なってもよい（「あるなし」）。3. 構成要素の意味関係は，「[前部要素]と何らかの関係 R を持った[後部要素]」（英語の名詞複合語について Booij 2010 が述べているもの）のような緩いものではない（後述）。

第一種と第二種の選択名詞を分かつのは，構成要素の語彙的意味の存在論的範疇である。第二種で結ばれるのは男・女のような独立した対象である。一方，選言名詞では，対象の性質，特に何らかの特質（attribute）の値が結ばれる。特質とは，対象についての知識の構造で，特質が規定する範囲の値を取る。例えば命題等の対象について，その真偽という特質の値として {真, 偽} がある。値は特質に概念的に依存し，特質は対象に概念的に依存する。構成要素が名詞以外の並列名詞「いい悪い」「言った言わない」「きれい汚い」が選言名詞になるのは名

詞以外が独立の対象を表さないためであろう。

多くの特質の値はそれ自体対象としては捉えられないが、値の名前で「大盛り一丁」のように、値を持つ対象をメトニミー的に表せる。そのようにして対象を並べたのが選言名詞の連言用法である。第二種選択名詞が選言用法として用いられるのは以下のメカニズムによる。例えば蕎麦と饅頭は店の麺の選択肢を尽くすため、両者を合わせることで麺のカテゴリーができる。カテゴリーのメンバー（個々の注文）の主要な区分は蕎麦であるか饅頭であるかになるため、個々のメンバーの情報として、[蕎麦饅頭：{蕎麦・饅頭}]という特質ができる。このメカニズムのため、特質に名前がなくとも、列挙された値のリストから何らかの特質が想像できれば新規に選択名詞を作ることができる（次例）。

(3) 太郎の眼鏡・コンタクト・裸眼は不明だ。[特質＝視力矯正の有無・方法]

並列名詞は選言の意味と連言の意味で多義とは考えにくい。どちらにも解釈できる例が極めて作りにくいからである。語彙的意味は中立的な特質の値のリストであり、名詞句として用いられるときに、値が連言か選言で結ばれると考えられる（各語で頻用の選言・連言の意味が記憶される可能性も排除しない）。名詞と名詞句のこの意味関係は Jackendoff and Audring 2020 の枠組みにおける語彙意味論と句の意味論の間のインタフェース規則として捉えられる。

最後に並列名詞の形式面についても触れておく。自立語から構成されるものは連濁せず、アクセントが1つにまとまらないものが多い。値は、スケール性・極性があるなら程度の大きいものから小さいものへ、プラス値のものからマイナス値のものへと並べられる（\*小中大，\*無し有り，\*汚いきれい）。

以上の形式的・意味的特徴は、三階層の形態論的構文スキーマのネットワーク（1. 並列名詞—2. 選言名詞・選択名詞—3. 極性名詞・第一種・第二種選択名詞）で捉えられる。構成要素が名詞以外の外心的複合語も、全体が名詞であることを指定する構文の事例として実現することで名詞として振舞える。一部パターンで新たな選択名詞を容易に作れるという意味で生産性があるという事実も、オープンな変数（同書）の下位スキーマが存在すると想定することで捉えられる。

**参考文献** Booij, G. 2010. *Construction morphology*. OUP.

Jackendoff, R. and Audring, J. 2020. *The texture of the lexicon*. OUP.

山泉実. 2019. 「極性疑問が潜伏している名詞」『158回日本言語学会予稿集』

## 遊離するように見える NP 数量詞の格付与について

## キーワード

等位接続, 格, 数量詞遊離, Nanosyntax, 主要部後置

## 問題の所在

遊離数量詞には, ホスト名詞句の右隣りにあって, 全体で1つの構成素をなす, と考えるべきもの (pseudo-FQ と呼ぶことにする) があり, 一方で, そうでないもの (genuine FQ と呼ぶことにする) もあり, これらによって二分される, という主張がある (川添 2002 など). 特に, 川添 (2002) は, pseudo-FQ の構成素性を, 以下(1)の「と」による等位接続を根拠にして主張した.

(1) (神尾 1977: 84 (9), 川添 2002: 164 (3))

私は[大きなゴム印]と[年賀はがきを 200 枚]注文した.

これは, 次の genuine FQ の例(2)と対比すべきである. (2)では, (数量詞とホスト名詞句と無関係な) 時間を表す副詞的表現「昨日」「今日」が等位接続の内側にあるのだが, このとき, 数量詞は, pseudo-FQ の場合と異なり, 等位接続の両方の要素になければならない.

(2)

a. (Koizumi 2000: 263 (93a), 川添 2002: 164 (4))

[学生が昨日 2 人]と[先生が今日 3 人]来た (こと)

b. (川添 2002: 169 (17))

\* [学生が昨日 2 人]と[先生]が来た.

(1)の pseudo-FQ の統語的性質を(2)の genuine FQ と区別させるための尤もらしい仮説は, pseudo-FQ が単一の, しかも, genuine FQ とは異なる範疇の構成素をなす, というものである. それを受け入れたとしても, なお, 次の問いが残る:

- 格標識は, (1)の等位接続全体が持つ (あるいは, それに対して付与されている) ものなのか? あるいは, 全体ではなく, 等位接続要素それぞれのみが持つものなのか? あるいはその両方か?
- 等位接続要素の格それぞれの認可 (もしくは付与) は, あるとすれば, どのようなものか?

## 結論

等位接続全体は, 格を持つ. そして, 等位接続要素それぞれも, 格を持つ. 述語などの

統語環境によって認可された格標識は、等位接続全体にまず Merge され、さらに、下位にある等位接続要素に波及される、というような記述が可能である。

さらに、このような記述は、Nanosyntax with workspaces (Starke 2018, Caha in prep.) に困難をもたらす。

### 議論の流れ・本質的に重要なデータ

等位接続全体と等位接続要素の両方が格を**同時に**持つことの端的な実例は(3)である：

(3)

- a. そしてもう一回、[[蓋を 3 つ]と、[箱を 1 つ]と]を持っていけば
- b. [[G の色要素を色分離するカラーフィルタを 2 つ]と、[R と B とが配列されたカラーフィルタを 1 つ]と]を有する構成としてもよい<sup>ii</sup>

Nanosyntax with workspaces では、複数の workspace への同時 Merge が操作として設けられている。これにより、格標識の、等位接続の要素への分配が自然に記述される。しかし、等位接続要素全体のもつ格標識の付与が上手くいかない。本発表では、それは Nanosyntax において、主要部後置型の主要部-補部関係を積極的に認めるほかないことを主張する。

### セールスポイント

経験的な観点からいえば、(3)は先行研究で扱われていないデータである。このデータは、先行研究の記述 (Vermeulen 2008, Weisser 2020) に反する。理論的な観点からは、Nanosyntax with workspaces の限界を指摘するものになる。

### 参考文献

- Caha, Pavel. In prep. *Case Competition in Nanosyntax: A Study of Numeral Phrases in Ossetic and Russian*.  
lingbuzz/004875. ◆ 神尾昭雄. 1977. 数量詞のシンタックス. 『言語』 6-8 : 83-91. ◆ 川添愛. 2002.  
「と」による等位接続と遊離数量詞. 『言語研究』 122 : 163-180. ◆ Koizumi, Masatoshi. 2000. "String  
Vacuous Overt Verb Raising." *Journal of East Asian Linguistics* 9 (3): 227-85. ◆ Muraki, and Enoch  
Iwamoto, 236-67. Tokyo: Kaitakusha. ◆ Starke, Michal. 2018. "Complex Left Branches, Spellout, and  
Prefixes." In *Exploring Nanosyntax*, edited by Lena Baunaz, Karen De Clercq, Liliane Haegeman, and Eric  
Lander, 239-49. Oxford: Oxford University Press. ◆ Vermeulen, Reiko. 2008. "Nonconstituent  
Coordination in Japanese : A Case of Phonological Reordering." *Linguistic Inquiry* 39 (2): 345-54. ◆  
Weisser, Philipp. 2020. "On the Symmetry of Case in Conjunction." *Syntax* 23 (1): 42-77.

---

<sup>i</sup> <https://ameblo.jp/deogis/entry-12558681434.html>

<sup>ii</sup> 日本国特許庁特許公報特許第 4941285 号『撮像装置、撮像システム、撮像方法及び画像処理装置』「発明の詳細」項 105 番



## 日本語におけるアロキュティビティ

キーワード: アロキュティビティ, CP, 「っす」, 形容詞, 方言

## 1. 問題の所在

日本語には、聞き手の属性などが述部周辺の形式に反映される言語現象がある。このような現象はアロキュティビティと呼ばれる。最もよく研究されている例には丁寧語の「です/ます」があり、聞き手の社会的地位や場面に応じて使い分けられることから、アロキュティブ標識であるとされる(Miyagawa 2017)。

もっとも、日本語のアロキュティブ標識は丁寧語に限定されず、(1)に示すように、「っす」や「でちゅ」もこれに含まれると考えられる。「っす」は「ます/です」に比べれば敬意が低減するが、若者の間では親しい先輩などに対して「っす」が用いられることがある。また、「でちゅ」は乳幼児やペットに対して用いられ、聞き手の属性を反映した標識である。

(1) a. これからご飯ですよ。 b. これからご飯っすよ。 c. これからご飯でちゅよ。

いくつかの先行研究は、丁寧語が CP(またはそれより上位)の投射と関係づけられることを論じている(Kishimoto 2013; Miyagawa 2017; Yamada 2019)。しかしながら、丁寧語は、形態的には時制要素の左隣に現れ、普通、時制要素の右側に現れることはない。つまり、先行研究では、TP の内部に丁寧語が現れるデータに基づいて、間接的に CP との関係性が論じられてきたというわけである。

本論では、形容詞述語文の「です」、「っす」、および長崎方言の「です」が CP に直接生起することを示す。

## 2. C 主要部に現れるアロキュティビティ標識

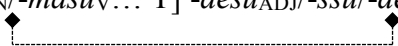
先行研究では動詞述語文と名詞述語文に現れる「です/ます」を中心に議論が進められてきたが、形容詞述語文をみると、丁寧語が C 主要部に生起することを簡単に確認することができる。(2a)に示すように、「です」は時制辞より外側に現れていることから、TP より上位にあることがわかる。さらに、(2b)では時制辞の右隣に「っす」が現れており、これも C 主要部の一つであると考えて良

い。(このとき、「です」と交替できない。)(3)は、アロキュティビティ標識がC主要部に現れる場合、過去時制がつけられないことを示している。これはT主要部がCPを補部にとることはできないからである。「っす」は常にCPに生起するわけではなく、単に「です」の短縮形として現れることもある。(4)のように、名詞述語文では時制辞の内側に現れ、過去時制をつけることも可能である。

- (2) a. 太郎が優しかったです。            b. 太郎が走ったっす。  
 (3) a. \*太郎が優しかったでした。        b. \*太郎が走ったっした。  
 (4) a. 買って正解でした。                b. 買って正解っした。

最後に、(5)に示すように、長崎方言では述語のタイプに関係なく、「です」が時制辞より外側に現れる。(6)のように時制辞をつけれられないので、CPに直接現れると言える。以上、形容詞述語文の「です」、「っす」、長崎方言の「です」から、日本語のアロキュティビティはCPの領域と関連づけられると考えられる。先行研究では、TPの内側に現れる丁寧語に議論が限定されていたが、CPの領域に現れるアロキュティビティ標識は先行研究の仮説を直接的に裏付けるデータとなる。

- (5) a. 太郎が来たですよ。            b. 太郎が日直やったですよ。  
 (6) a. \*太郎が来たでしたよ。        b. \*太郎が日直やったでしたよ。  
 (7) [CP [TP ...-desu<sub>N</sub>/-masu<sub>V</sub>... T] -desu<sub>ADJ</sub>/-ssu/-desu<sub>NAGASAKI</sub>]



### 参考文献

Kishimoto, Hideki. 2013. Notes on correlative coordination in Japanese. In *Deep Insights, Broad Perspectives: Essays in Honor of Mamoru Saito*, ed. Y. Miyamoto, D. Takahashi, H. Maki, M. Ochi, K. Sugisaki, and A. Uchibori, 192–217. Tokyo: Kaitakusha.

Miyagawa, Shigeru. 2017. *Agreement Beyond Phi*. Cambridge MA: MIT Press.

Yamada, Akitaka. 2019. *The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers*. Doctoral Thesis. Georgetown University.

## V-V 型複合語における品詞の違いに伴う意味の変化について

キーワード：複合動名詞、複合動詞、副詞のスコープ、telicity

## 1. 問題提起

動名詞 (verbal noun: VN) は、軽動詞 (light verb) 「スル」を伴って動詞化する表現を指す (影山 1993 : 26)。動詞と動詞からなる複合語 (以下、V-V 複合語と呼ぶ) として、(1) のようなものがよく知られている (松本 1998、Fukushima 2005)。

(1) \*立ち読む-立ち読み-立ち読みする

(1) では、「立ち読み」が「立ち読む」から名詞化されたように見えるが、「立ち読む」は言えず、「立ち読みする」にしか使われない。これは、(2) の「貸し出し」とは対照的である。

(2) 貸し出す-貸し出し-貸し出しする

Fukushima (2005) は、(1) の「立ち読み」のようなものは、「スル」をつけて文の述語に使われており、構成要素の項の合成も通常の V-V 複合動詞と同様に行われると指摘している。また、影山 (1993) も、(1) の「立ち読み」と (2) の「貸し出し」の両方とも項構造を持っていると述べている。しかし、「立ち読み」のような複合動名詞と V-V 複合動詞との違いが品詞の相違だけであるのかはまだ明らかにされていない。本発表は、両者の間に、複合動名詞は出来事しか表せないが、複合動詞は出来事と結果状態の両方を表すことがありうるような意味の違いがあると主張し、それを示す2つの言語事実を提示する。

## 2. 副詞の取るスコープの違い

複合動詞と「スル」をつけて使われる複合動名詞は、(3) のように構成要素は同じであるが、副詞「もう少しで」の取るスコープの読みに差が出てくるのが観察される。(3) では、「建て直す」の場合、「もう少しで」は(a)行為及び(b)結果にかかる読みの両方を取るが、「建て直しする」の場合、「もう少しで」は行為にかかる読みしか取らない。

(3) 「建て直す/建て直しする」

① 「もう少しで家を建て直すところだったのに、邪魔が入った」。

a. 行為の読み：家を建て直そうと思っていたが、準備していた段階で邪魔が入った

b. 結果の読み：家を建て直しているが、まだ完成していなかった段階で、邪魔

が入った

②「もう少しで家を建て直しするところだったのに、邪魔が入った」。

a. 行為の読み：家を建て直そうと思っていたが、準備していた段階で邪魔が入った

b. \* 結果の読み：家を建て直しているが、まだ完成していなかった段階で、邪魔が入った

### 3. Telicity 読みの違い

並列関係の複合語では、telicity に違いが見られる。

(4) a. 3 分間/\*3 分で泣いた/叫んだ

b. 3 分間/\*3 分で泣き叫んだ

「泣き叫ぶ」は、「泣く」、「叫ぶ」の両方と同じように、非完結性を表す。

(5) a. そのドアを 5 分間/5 分で開けた

b. そのドアを 5 分間/5 分で閉めた

c. そのドアを 5 分間/\*5 分で開け閉めした。

「開ける」、「閉める」という動詞は通常一瞬で終わってしまう出来事を表すので、事象の終結点が特定でき、結果状態の解釈を持っている。それに対して、「開け閉めする」は事象の終結点が特定できない事象を表し、行為の読みしか表せない。そのため、結果状態の解釈を持つことができない。

### 4. まとめ

以上、副詞が取るスコープの読みの違いと、構成要素と複合語の telicity の読みの違いから、複合動詞と複合動名詞の表す意味の違いを示した。複合動詞と比べて、複合動名詞は行為の読みしか持たないことが明らかになった。先行研究で明らかにされていない両者の相違に対して、本研究は行為/結果の読みの違いがあると主張する。このような結果から、複合動名詞と複合動詞とは同じ語形成のプロセスを経していない可能性が示唆される。

参考文献 Fukushima, Kazuhiko (2005) Lexical V-V Compounds in Japanese: Lexicon vs. Syntax. *Language* 81 (3): 568-612 / 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房 / 松本曜 (1998) 「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』 114 : 37-83

### Compound verbs in transitivity harmony and alternation

**Keywords:** compound verb, transitivity, Distributed Morphology, Japanese

**Introduction:** In this paper, we deduce the generalization about “lexical” compound verbs in Japanese called the Principle of Transitivity Harmony (PTH; Kageyama, 1993) and its exceptions (Matsumoto, 1996), with special focus on transitivity alternations. Specifically, syntactic structures of PTH-compliant and PTH-incompliant compound verbs are proposed in the framework of Distributed Morphology (Halle & Marantz, 1993). Moreover, event interpretations of compound verbs are also derived from the proposed syntactic structures, and several theoretical implications for a theory of roots will be discussed.

**Transitivity Harmony:** Two types of compound verbs have been descriptively distinguished in the literature: lexical and syntactic compound verbs (Kageyama, 1993), theoretically proposed to be built in the lexicon and the syntax, respectively. One of the most important well-formedness conditions on “lexical” compound verbs is the *Principle of Transitivity Harmony* (PTH) summarized below (Kageyama, 1993:117; cf. Nishiyama & Ogawa, 2014:88-89):

(1) *The Principle of Transitivity Harmony* (PTH)

In a V-V compound, if V1 is a verb that has an external argument (i.e. a transitive or unergative verb), V2 must also be a verb that has an external argument, whereas if V1 is a verb that lacks an external argument (i.e. an unaccusative verb), V2 must also be a verb that lacks an external argument.

The PTH stipulates that V1 and V2 must harmonize in the presence/absence of an external argument. For example, compound verbs whose V1 and V2 both require or suppress an external argument are acceptable (2a-b), whereas those with V1[+external] and V2[-external] or vice versa (2c-d) are unacceptable:

- (2) a. V1<sub>[+external]</sub>-V2<sub>[+external]</sub>: osi-taosu, kiri-toru  
           push-break cut-remove  
       b. V1<sub>[-external]</sub>-V2<sub>[-external]</sub>: kuzure-otiru, nari-hibiku  
           crash-fall ring-echo  
       c. \*V1<sub>[+external]</sub>-V2<sub>[-external]</sub>: \*osi-taoreru, \*ori-magaru  
           crash-fall ring-echo  
       d. \*V1<sub>[-external]</sub>-V2<sub>[+external]</sub>: \*kuzure-otosu, \*ore-mageru  
           crash-fall ring-echo

**Exceptions to Transitivity Harmony:** However, various exceptions to the PTH have been observed in the literature (Kageyama, 1993; Matsumoto, 1996; Fukushima, 2005; Yumoto, 2005; Nakamura 2018). Most importantly, compound verbs which undergo transitivity alternation (Jacobsen, 1992) do inevitably violate the PTH (3):

- (3) a. V1<sub>[+external]</sub>-V2<sub>[-external]</sub>: uti-agaru, hiki-tigireru, tuki-deru, tuki-sasaru  
           strike-rise pull-tear push-stand push-stick  
       b. V1<sub>[-external]</sub>-V2<sub>[+external]</sub>: mai-ageru, karami-tukeru, teri-tukeru, tare-nagasu  
           dance-raise tangle-put shine-put hang-flush

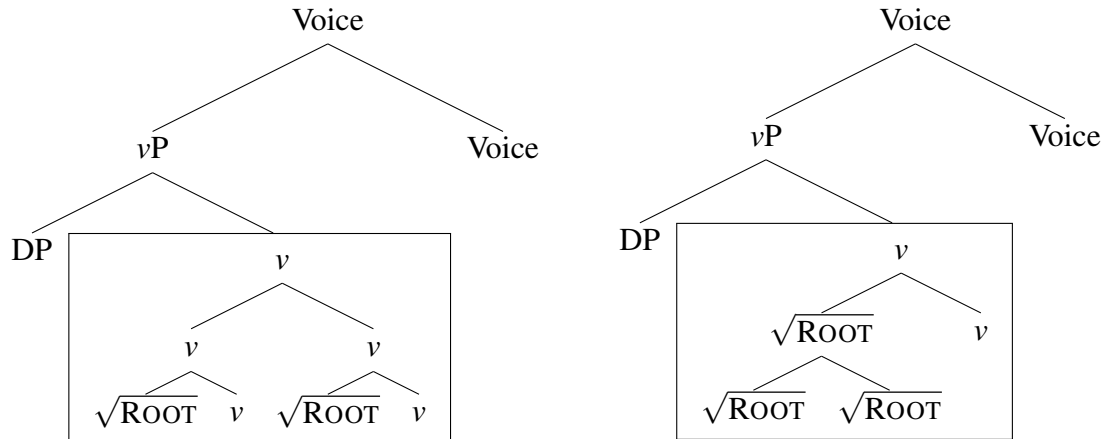
These exceptions suggest that the PTH is too strong in that acceptable compound verbs are incorrectly ruled out. Kageyama (1993) invented lexical last resorts to rescue the PTH, but various problems with those lexical operations have been pointed out in the literature (Matsumoto, 1996; Fukushima, 2005; Yumoto, 2005).

(4) *Generalizations*

- a. Non-alternating lexical compound verbs are PTH-compliant.  
 b. Alternating lexical compound verbs are PTH-incompliant.

**Syntactic structures of “lexical” compound verbs:** In the framework of Distributed Morphology (Halle & Marantz, 1993), where roots are acategorial and verbalized by the functional head  $v$  (Embick & Marantz, 2008), there are two logical possibilities to build compound verbs: Verb-Verb compounds (merger of two roots after verbalization) and  $\sqrt{\text{ROOT}}\text{-}\sqrt{\text{ROOT}}$  compounds (merger of two roots before verbalization). We propose that these two logically possible syntactic structures correspond to syntactic structures of PTH-compliant/non-alternating and PTH-incompliant/alternating compound verbs, respectively:

- (5) a. *PTH-compliant compound verbs*                      b. *PTH-incompliant compound verbs*



**Deducing Transitivity Harmony and beyond:** On the assumption that roots are atransitive (with no argument structure information) and transitivized by functional heads like  $v$  (Harley, 2008) and Voice (Oseki, 2017), the PTH and its exceptions can be deduced from the proposed syntactic structures. For PTH-compliant compound verbs, transitivity must harmonize because two roots are already verbalized and transitivized when V1 and V2 are merged. In contrast, for PTH-incompliant compound verbs, this is not the case simply because there is no transitivity in the first place when V1 and V2 are merged. In addition, given further that one  $v$  semantically introduces one event (Marantz, 1997), the observation that PTH-compliant and incompliant compound verbs have bieventive “cause” and monoeventive “manner” interpretations can also be derived. The proposal of this paper can be summarized as follows:

Transitivity harmony	Transitivity alternation	Syntactic structure	Event interpretation
compliant	non-alternating	$v$ - $v$ merger	bieventive “cause”
incompliant	alternating	$\sqrt{\text{ROOT}}$ - $\sqrt{\text{ROOT}}$ merger	monoeventive “manner”

**Conclusion:** In this paper, we have proposed syntactic structures of “lexical” compound verbs in the framework of Distributed Morphology and syntactically deduced the Principle of Transitivity Harmony and its exceptions. If our proposal is on the right track, there are (at least) three theoretical implications: (1) the term “lexical” as in the pervasive lexical vs. syntactic dichotomy must be taxonomic at best, (2) roots are acategorial and categorized by functional heads, and (3) roots are also atransitive and transitivized by functional heads, corroborating the central assumptions of Distributed Morphology.

**Selected references:** Embick, D. & Marantz, A. (2008) Architecture and Blocking.; Halle, M. & Marantz, A. (1993) Distributed Morphology and the Pieces of Inflection.; Harley, H. (2008) On the causative construction.; Kageyama, T. (1993) *Grammar and Word Formation.*; Marantz, A. (1997) No escape from syntax.; Matsumoto, Y. (1996) *Complex Predicates in Japanese.*; Nishiyama, K. & Ogawa, Y. (2014) Auxiliation, Atransitivity, and Transitivity Harmony in Japanese V-V Compounds.

## ノルウェー語の自動詞化と動詞意味論

キーワード: 自動詞化、項構造、動詞意味論、ノルウェー語

本発表では、Haspelmath (2016) の指摘する通言語的傾向とノルウェー語のレキシコンの構造に着目しながら、ノルウェー語の自動詞化を分析する。ノルウェー語の自動詞化には、主に、自動詞と他動詞が同形の自他両用型 (1)、再帰代名詞 *seg* を用いる再帰型 (2)、受動接辞 *-s* を用いる *-s* 受動型 (3) がある。

- |     |    |                        |                  |                 |    |                             |                    |
|-----|----|------------------------|------------------|-----------------|----|-----------------------------|--------------------|
| (1) | a. | <i>Jeg</i>             | <i>slukker</i>   | <i>lyset.</i>   | b. | <i>Lyset</i>                | <i>slukker.</i>    |
|     |    | I                      | put out          | light.DEF       |    | light.DEF                   | go out             |
|     |    | 'I put out the light.' |                  |                 |    | 'The light goes out.'       |                    |
| (2) | a. | <i>Jeg</i>             | <i>sprer</i>     | <i>viruset.</i> | b. | <i>Viruset</i>              | <i>sprer seg.</i>  |
|     |    | I                      | spread           | virus.DEF       |    | virus.DEF                   | spread REFL        |
|     |    | 'I spread the virus.'  |                  |                 |    | 'The virus spreads.'        |                    |
| (3) | a. | <i>Jeg</i>             | <i>ødelegger</i> | <i>huset.</i>   | b. | <i>Huset</i>                | <i>ødelegge-s.</i> |
|     |    | I                      | destroy          | house.DEF       |    | house.DEF                   | destroy-PASS       |
|     |    | 'I destroy the house.' |                  |                 |    | 'The house gets destroyed.' |                    |

本発表では、このノルウェー語の自動詞化現象について、自他交替の通言語的な傾向を自発性と関連づける Haspelmath (2016)、および、レキシコンの構造に着目して分析を試みる。特に、ノルウェー語の動詞を (A) 自他両用型と *-s* 受動型をとる動詞、(B) 再帰型と *-s* 受動型をとる動詞、(C) *-s* 受動型のみをとる動詞の 3 種類に分け、各特徴について分析する。方法論としては、聞き取り調査に加え、noTenTen17 Bokmål コーパス (<https://www.sketchengine.eu/notenten-norwegian-corpus/>) を使用する。

まず第一に、(A) 自他両用型と *-s* 受動型をとる動詞は、自発性によって説明できる動詞とできない動詞がある。Haspelmath (2016) は、通言語的に自他両用型をとるものには、自発的に起こりやすい意味を持つ自動 (AUTOMATIC) 動詞が多いと指摘している。確かに、ノルウェー語でも、形状や性質に変化が生じる自然変化 (*smelte* 「溶ける」、*fryse* 「凍る」、*tørke* 「乾く」、*koke* 「沸騰する」、*brenne* 「燃える」、*slukke* 「(火などが) 消える」) や位置の変化や動きを表す動詞

(*synke*「沈む」, *rulle*「転がる」, *snu*「向きが変わる」, *gynge*「揺れる」)など自発的に起こりやすいものが多い。しかし、他にも、アスペクト動詞 (*begynne*「始まる」, *slutte*「終わる」, *stoppe/stanse*「止まる」)や破壊動詞 (*knuse*「割れる」, *knekke*「折れる」)など自発性だけでは説明ができない動詞がある。

次に、(B)再帰型と-s受動型とる動詞は、形状や性質に本質的な変化がない状態変化動詞であり、自発性が高い事象と低い事象の両方を表す。Haspelmath (2016) は、自発的に起こりづらい意味を持つ高コスト動詞 (COSTLY) が再帰代名詞等を伴う自動詞化をしやすいと指摘しているが、ノルウェー語の例 (*spre*「広がる」, *utvikle*「発展する」, *forbedre*「上達する、改善する」, *samle*「集まる」, *åpne*「開く」, *lukke*「閉まる」, *dele*「分かれる」等)では、自発性が特定し難い。

最後に、(C)自他両用型も再帰型もとることができず、-s受動型しかとることができない動詞は、様々な破壊動詞 (*ødelegge*「破壊する」, *rive*「裂ける」, *slå*「打たれる」, *klippe*「(ハサミ等で)切られる」等)や喪失動詞 (*miste*「なくなる」, *oppløse*「分解する」)である。これは、Haspelmath (2016) が指摘する、動作主が必ず含意される動作主動詞 (AGENTFUL) は、分析的な逆使役型あるいは受動態で表されやすいという通言語的な傾向と合致していると言える。

さらに本発表では、以下の2点についても議論する。第一に、それぞれの自動詞化と動詞意味論の間にはどのような関係があるかについて、影山 (1996); Koontz-Garboden (2009); Alexiadou & Doron (2012) などの観点から取り組む。自動詞化パターンにみられるノルウェー語の動詞の分布は、自発性だけではなく、形状や性質の本質的な変化の有無など複数のパラメタを考慮する必要がある。第二に、ノルウェー語は、受動標識よりも再帰型の方が分析的であるという通言語的に珍しい特徴をみせる。

Alexiadou, Artemis & Edit Doron. 2012. The syntactic construction of two non-active Voices: Passive and middle. *Journal of Linguistics* 48(1). 1–34.

Haspelmath, Martin. 2016. Universals of causative and anticausative verb formation and the spontaneity scale. *Lingua Posnaniensis* 58(2). 33–63.

Koontz-Garboden, Andrew. 2009. Anticausativization. *Natural Language & Linguistic Theory* 27(1). 77–138.

影山太郎. 1996. 動詞意味論: 言語と認知の接点. Vol. 5. くろしお出版.



## 非対格他動詞としての「ラス」形

キーワード：日本語，非対格他動詞

本発表では，影山（2002）で提案された非対格他動詞という動詞クラスに，新たにラス形他動詞の一部が該当することを指摘し，「ラス」という独立の形態によって非対格他動詞構造が作られると主張する。

自動詞には非能格自動詞と非対格自動詞とが存在し，語彙概念構造（以後，LCS）において前者は [x ACT] を担い，後者は [(y) BECOME [y BE AT-z]] を担うと考えられている。ところが，他動詞においては，非能格自動詞に対応する [x ACT ON y] を担う働きかけ動詞（例 たたく）が存在するのに対し，非対格自動詞に対応する動詞の存在は定かではない。影山（2002: 120）はこれをミッシングリンクと呼び，これを埋める「非対格他動詞」が存在することを示した。この動詞クラスには，一部の自他同形の他動詞（「生じる」「ふく」），「教える／教わる」動詞，「～出す」動詞（例 湧き出す）が含まれるとし，これらの他動詞は細かな点は異なるものの，受動化が不可能という点で共通していると指摘している。ここでは議論の都合上「～出す」の例のみ取り上げる。

- (1) a. 木から芽が吹き出る。  
 b. 木が芽を吹き出す。  
 c. \*芽が木によって吹き出された。（影山（2002: 137）一部改変）

影山（2002: 126）によれば，(1c)が容認されないのは，(1b)における他動詞の主語が外項ではなく，単なる場所名詞であるからとし，次のような LCS を仮定している。以下の LCS は(1b)に対応する。

- (2) [z<sub>i</sub> BECOME [y BE NOT-AT(-IN)-z<sub>i</sub>] （影山（2002: 139））

(2)から(1a)に対応する LCS がどのように派生されるのかについては明言されていないが，重要なのは，外項を導入する ACT ON（及び CAUSE）を用いることなく，2つの項（特に BECOME の主語である z 項）が表現されている点である。これにより，他動詞文の主語として現れる項が外項ではないこと保証される。

(2)の構造は，「腫れる／腫らす」にも該当すると思われる。この動詞も(1)と同様に受動化できない。

- (3) a. 一晩中泣いて，目が腫れた。  
 b. 太郎が，一晩中泣いて，目を腫らした。

- c. \*目が太郎によって腫らされた。

この場合の「太郎」は(1)の「木」と同じく場所名詞であると思われる。ところが、この「腫らす」のように「ラス」という形態を含む他動詞において、他動詞の主語が場所名詞ではないものの、受動化ができない例が観察される。

- (4) a. 桃が腐った。  
b. うっかりして、花子が桃を腐らせた。  
c. \*?桃が花子によって腐らされた。

また、「腫らす」「腐らす」はこれら以外に他動詞形態を持たないが、以下に示す「切らす」「蒸らす」はいずれも、「切る」「蒸す」という他動詞形態を有しており、ラス形を用いた場合には、ラス形ではない他動詞を用いた場合と比べて受動化した場合の容認度が下がる。

- (5) a. 花子がうっかりコピー用紙を切らした。  
b. ??コピー用紙が花子によって切らされた。  
(6) a. 花子がハサミでコピー用紙を切った。  
b. コピー用紙が花子によって切られた。  
(7) a. 太郎がご飯を蒸らした。  
b. ??ご飯が太郎によって蒸らされた。  
(8) a. 太郎が肉まんを蒸した。  
b. 肉まんが太郎によって蒸された。

このことから、ラス形ではない他動詞 ((6), (8)) は使役変化他動詞、ラス形は非対格他動詞 ((5), (7)) という役割分担が存在することがわかる。

以上から、非対格他動詞は影山 (2002) が挙げた動詞の他に、「ラス」形態を持った他動詞 (の一部) もそれに含まれ、特に(5)-(8)で示したように、ラス形他動詞のみが非対格他動詞としての用法を持つことから、「ラス」という独立した形態が非対格構造を作り出す機能を持つことが示唆される。本発表ではこれらの点を考慮に入れ、(2)に代わるより一般的な非対格他動詞に対応する LCS 及び操作を検討する。

#### 参照文献

影山太郎. (2002). 「非対格構造の他動詞」伊藤たかね (編) 『文法理論：レキシコンと統語』 (pp. 119-145). 東京: 東京大学出版会.